前を向き生きていく

町営住宅で新生活

町営住宅で新生活を始めた日当正人さん（手前）と日当さんの世話をする大西真由さん

車椅子の日当さん（洋野）

交通事故、今度は自宅消失

苦境に負けず

洋野町種市の日当（ひなた）正人さん(56)は約10日間の避難所生活を経て、町営住宅で新生活を始めた。35年前に交通事故で両足の自由を失い車椅子生活を送ってきたが、今回の津波で家を失った。人生2度の苦境に立たされながらも、日当さんは「皆さんに助けてもらった。生きてるだけで幸せ」と前向きに新たな一歩を踏み出した。

日当さんは大地震発生時、近所の理髪店にいた。店主らの協力を得て急いで自宅から緊急用のバッグ一つを持ち出したが、直後の津波で自宅は跡形もなく流された。日当さんは「家の中にいたら地震で車椅子ごと倒れて動けなくなっていたかもしれない。運が良かった」と振り返る。

着の身着のままの格好で避難所生活を始めたが、地元の人たちが服を持ち寄り、温かい食事なども用意。「日ごろの避難訓練でも消防団が見回りに来てくれるし、いつも地域の方に助けてもらっている」と感謝する。

小さいころから日当さんを「オッチャン」と慕う久慈東高1年の大西真由さんも同じく避難所から町営住宅に。避難所ではトイレの世話などをしてもらった日当さんは「近くにいてとても助かる」と目を細める。

日当さんは「他の被災地の人たちのことを考えればくじけている場合ではない。前向きに生きたい」と前を見据える。

宮古北高に避難の赤沼さん

身ぶりを交えながら「94歳だから94馬力で頑張るの」と冗談を言い、同室の被災者を笑わす赤沼ヨシさん＝24日午後、宮古市・宮古北高

被災者和ます 93歳

「みんな、笑顔を」若い世代に経験伝える

宮古市田老の宮古北高で避難所生活を送る赤沼ヨシさん(93)は、持ち前の明るさで被災者の心を和ませている。

赤沼さんが身を寄せるのは、15人が避難する同校の一室。赤沼さんのように津波で家を奪われた人々が共に暮らす部屋からは、笑い声が絶えない。

数え年で94歳の赤沼さん。「足が不自由だから押し車を94馬力で押して逃げたのよ」

思い出すのもつらい被災の様子をからりと笑い飛ばしたと思えば「若ければ彼氏も来たけれど、自衛隊の人におんぶしてもらって助けられたの」とたたみかけ、被災者からどっと笑いが漏れる。

避難所を訪問した達増知事には田老の復興を熱く訴え、知事に「こちらが励まされました」と言わしめたという。赤沼さんは「今度は菅首相が来るのを待っている」と、いたずらっぽく笑う。

自身も経験した1933（昭和8）年の昭和三陸大津波の話や身の上話…。話題も次々と変え、相部屋の避難者も「楽しくて夜も笑いが絶えない」「心が明るくなる」と目を細める。

田老生まれの田老育ち。昭和の津波で壊滅的な被害を受けた地元をよく知り、親からは津波への備えを聞き続けていた。「こんな年だから恥をかいたっていい」と、若い人に自分の経験と思いを伝えたいと思っている。

「悲しんでいても体が悪くなるだけ。みんなで笑ってがんばっぺし」と語りかけると、また部屋中に笑みが広がった。

復興へ父と一緒に

高田病院副院長の長男・佐藤さん

奉仕活動を始動

NPO設立

陸前高田市の災害対策本部でボランティアの受け入れ状況を確認する佐藤慧さん（中央）と佐藤敏通副院長

妻が行方不明のまま不眠不休で患者や被災者の治療を続け、過労で一時入院した県立高田病院の佐藤敏通副院長(57)は、長男慧（さとし）さん(28)＝東京都中野区在住＝と被災地の復興支援に乗り出した。ジャーナリストの慧さんは震災直後に仲間と任意NPO団体「みんつな」（本部・東京都）を立ち上げ、ボランティアスタッフを陸前高田市などに投入する計画。震災後に慧さんが所属する通信社・スタディオアフタモード（本社横浜市）など約50団体で設立。登録者はジャーナリストや心理カウンセラー、大学生などの現地活動スタッフのほか、街頭募金などの後方支援を含めて約千人に上るという。

震災時はアフリカのザンビアで取材活動をしていた慧さんは13日夜に帰国し、19日夜に盛岡市の県立中央病院に入院していた佐藤副院長と再会。21日に退院した佐藤副院長と陸前高田入りし、行方が分からない母淳子（あつこ）さん(54)を捜索。現地災害対策本部などを視察した。

慧さんは「まずは現地がどのような状況で、何を必要としているかを国内外に発信したい。現地は支援物資やボランティアが大量に届いてもそれを仕分ける能力がない。仕分けの段階から手伝えば有意義な援助につながると思う」と話す。

2人は「今後は被災者の心のケアが一番大切になる」と口をそろえる。慧さんは陸前高田市を拠点に、市社会福祉協議会と連携して現地ボランティアスタッフの活動環境を整える。佐藤副院長は当面の間休養し、被災地に適した医療システムの構築などについて助言する。

みんつなではスタッフや支援情報などを募集している。詳しくはホームページ（http://www.mintsuna.net/）まで。

皆さまを思い、案じています

小沢征爾さん

東日本大震災の被災地にメールで、世界で活躍する指揮者の小沢征爾さんからメッセージが届いている。若手演奏家らと来県して沿岸などで公演した縁で、関係者を通じて各地で携わったスタッフらに2通送られた。

小沢さんは2002年と05年、若手奏者らと一緒に各地で公演する「コンサートキャラバン」のために来県。05年には、宮古でホストファミリーを引き受けてくださった皆さまを大きな災害が襲っています。

報道であまりにもひどい惨状を目にし言葉もありません。

衷心からのお見舞いを申し上げますとともに、皆さまと皆さまのご家族のご無事を心よりお祈りするばかりです。

小沢征爾

小沢征爾さんがメッセージ

本県関係者に届く

本日、私たちキャラバンを2回にわたって、美しいみちのくに温かく迎え、そだくさった皆さまへ

◇　◇

キャラバンを支えてくださった皆さまへ

キャラバンを支えてくださった皆さまへ

東日本大震災の被災地のために来県。05年には古市や大槌町の学校などで演奏会を開いた。

小沢さんのメッセージは、キャラバンに協力したNPO法人コンサートキャラバン・イーハトーブの副代表を務めた蒲沢茂さん(57)＝矢巾町＝を通じ現地で携わったスタッフやホームステイ先などに届いているという。

県内の関係者に届いたメッセージは次の通り（原文尊重）。

キャラバンを支えてくださった皆さまへ

私たちキャラバンを2回にわたって、美しいみちのくに温かく迎え、そだくさった皆さまへ

◇　◇

キャラバンを支えてくださった皆さまへ

本日、宮古でホストファミリーを引き受けてくださった皆さまを大きな災害が襲っています。

生内克明さんご夫妻が大津波に巻き込まれ、残念ながら亡くなられたとの連絡を受けました。

生内さんご夫妻はキャラバンメンバーのフルート奏者（2名）とバスーン奏者（1名）を受け入れてくださった方々です。

生内さんご夫妻のご無念を思いますと、言葉もございません。

心よりご冥福をお祈りいたしますとともに、生内さんのご家族の皆さまに衷心よりお悔やみを申し上げます。

事態は決して楽観を許しませんが、皆さまと皆さまのご家族はもとより、この災害に遭われた方々のご無事をお祈りいたしております。

キャラバンメンバーともども、常に皆さまのことを思い、案じております。

小沢征爾

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。